

## 決断主義なき決定の思考 ニエリダヴェンチニアン

Making Decisions without Decisionism: Derrida with Schmitt

宮崎裕助

Yusuke Miyazaki

決断が、「近代」という企ての限界に際立つて浮上する問題であることはこれまでしばしば指摘されてきた。かつてマックスウェーバーが「脱魔術化」と呼んだ、近代科学による世界の合理化のプロセスは、二〇世紀初頭、いわばその反作用として、合理化によって閉ざされた近代という「鋼鉄の檻」から脱出せんとする強い衝迫をもたらすに至った。

そのひとつの極点が、両大戦間のドイツ思想の一角に、とりわけヴァイマル共和国の危機的な状況のなかから生じてきた「決断の思考」である。ノルベルト・ポルトの労作『脱魔術化された世界からの脱出』が描き出したように、カール・シュミットの『政治神学』(一九三二)とマルティン・ハイデガーの『存在と時間』(一九二七)は、この思考を最もラディカルな

かたちで担った著作とみなすことができる。それらは「決断主義的なパトスをもって、第一次大戦後の麻痺し混乱した意識状態に立ち向かった」のであり、この観点からすれば「ヴァイマル共和国の危機は、思考の危機へと、麻痺状態に陥っている現在には、決断の時代へと尖鋭化されるべきもの」だったのである[1]。

だが、それらの歴史的経緯を少しでも知る者からすれば、シュミットの「決断」[Entscheidung]概念とハイデガーの「決意性」[Entschlossenheit]概念が、ある種の禍々しい政治的負荷を帯びているということは否定できない。シュミットの決断の理論は、リベラルな議会制民主主義の優柔不断から袂を分かたべく、主権を担う指導者が、純粹に権威的な

決断によってドイツ民族の政治的実体を規定するという展望を拓き、ナチズムの独裁体制に至る全体主義国家の理論的支柱となった[2]。また、三〇年代のハイデガーは、短期間ではあれフライブルク大学総長としてナチスの政治に加担するなかで、ドイツ民族全体として「われわれがわれわれ自身を意志する」という「共同的な決断」を鼓舞していた(ドイツの大学の自己主張)[3]。政治へのこうした関与は、彼らの著作がラディカルであればあるほど、理論と実践との二分法を単純に許容しなくなる。というのも、ここでは理論の徹底はつねに同時に、実践的な帰結を伴うのであり、その逆もまた同様であるからだ。カール・レーヴィットがかつて「第一次大戦後期におけるドイツの世代の破局的思考法」[karakrophische Denkweise][4]を指摘していたように、ハイデガーやシュミットの著作は、一時の個人的な政治的「過誤」から切り離し、純粹に理論的な次元で解釈するだけでは済まされない、複雑な哲学—政治的含意を巻き込むのである。

それから半世紀以上の後、一見まったく別の文脈において

ではあるが、ジャック・デリダは、脱構築の名のもとにみずからの企てが曝されてきた誤解を解くべく、次のように力説していた。すなわち、脱構築とは、あらゆる規範の決定不可能性を導くことで正義の根拠を掘り崩してしまう無責任な思考ではなく、むしろ「決定不可能なものを経験における決定」[decision]の思考であり、それどころか「決断のみが正義にならなければならない」、したがって「脱構築とは正義である」と[5]。こうしたデリダの「脱構築」思想は、たしかにひとつの「決定の思考」[6]として要約することができる。しかしながら「決断」という主題をめぐる大戦間期の哲学的かつ政治的なコンテクストを想起(す)し、このことはさまざまな問いを呼び寄せるように思われる。いつたいデリダの「決定の思考」は、シュミットやハイデガーの決断主義とどのような関係にあるのだろうか。デリダの言う「決定」は、そうした決断主義の「決断」といかなる点で接近し、いかなる点で異なると言えることができるのだろうか。そもそも「決断」とはつねに行為の決定であり、ある種の示威や態度表明を含む——だからこそ決断は政治的